

教師の「芽線」による子供の捉えと変容の可能性

Possibility of teacher's "budding lines" on understanding children
and children's transformation

辻井満雄	村田夏樹 ¹
TSUJII Mitsuo	MURATA Natsuki
宮腰真央 ²	石垣孝太 ³
MIYAKOSHI Masao	ISHIGAKI Kouta
大島一也 ⁴	林大登 ⁵
OSHIMA Kazuya	HAYASHI Hiroto
大越咲由莉 ⁶	
OKOSHI Sayuri	

これからの予測困難な時代においては、自分の可能性を自ら開いていく強い意志と行動力が重要となる。とりわけ学校教育においては、子供の可能性を引き出して自己肯定感を高めるために、教師がどのような視点を持って子供と関わり、子供に言動を返していくかが今までに増して重要となってくる。本研究では、教師が「芽線」を意識して子供と関わる中で、子供にどのように変容が起こるのかについて明らかにする。また、その過程において教師と子供にどのような相互作用が起きたのかについて、教師の省察をもとに明らかにする。その結果、教師が「芽線」を意識することで、教師の子供の捉えに変化が起こり、子供への関わりが見直されて、子供の自己肯定感が高まる可能性があることが示唆された。

キーワード： 芽線, キャリア教育, なりたい自分, 教師教育, 省察

1. 問題と目的

¹ 射水市立小杉小学校

⁴ 射水市立金山小学校

² 高岡市立福岡小学校

⁵ 射水市立片口小学校

³ 射水市立東明小学校

⁶ 氷見市立窪小学校

日本が人口減少の局面に突入する中で、新型コロナウイルスの感染拡大が起こり、これからを生き抜く子供にとって本当に大切な教育とは何かを、日本全体で問い直さざるを得ない状況となった。

令和3年1月に中央教育審議会によって「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」が答申された。答申には、「子供の側に立ち、子供を主語にする」という学ぶ側からの視点で学校教育を捉え直す重要性が示された。これからの予測困難な時代の中で、社会の急激な変化に対応し、自分の可能性を自ら開いていく強い意志と行動力が重要となっていく。このような力を育むために、学校教育に寄せられる期待と課せられる責任は大きい。

平成2年度版学習指導要領には、これからの時代を生き抜く力を身に付けることを目指して、キャリア教育の充実が示されている。子供が、自らの取組を振り返りこれからの生き方を考えていくためのツールとしてキャリア・パスポートの活用も示された。子供は刹那的に今を生きることが多いが、その視点を未来志向へと向け、自分の将来を見据えた上で主体的に資質・能力を獲得していくことが重要である。そのための教師の支援は、どのようであったらよいらうか。

子供が自らを振り返り、自らの可能性を信じて歩み出すために、教師の果たす役割は大きい。教師の些細な言動によって、子供は自分を肯定的に捉えたり否定的に捉えたりする。また、教師や友達の適切なフィードバックによって、子供は自己理解を促すことができ自己肯定感の醸成にもつながっていく。人は一人では生きていけず、必ず他者との関わりの中で自分の存在や可能性を見付けている。そのため、学校教育において、教師がどのような視点を持って子供と関わって子供に言動を返していくかということは、不易に追究される内容とも言える。

そこで本研究では、教師が未来志向で子供を捉え、肯定的なフィードバックを返すことによって、子供がどのように変容するかについて明らかにしていく。また、子供の可能性を積極的に教師が捉えることで、他者との関係の中での子供の姿はどう変化するか、また教師自身の子供の捉えはどのように変化するのかについても、併せて考察していく。

一方でこのような調査においては、対象が人であるため、条件を制御した実験を行い効果を明確に検証することが難しい。そこで、辻井ら(2019)が明らかにした「芽線」を、教師が子供を未来志向で捉える際の視点とする。どのような年次の教師であっても、「芽線」といった共通の視点を持って子供と関わることで、未来志向で子供の可能性を捉えようとする意識を継続的に持つことができるのではないかと考える。

以下は、辻井ら(2019)が定義する「芽線」である。

～「芽線」とは～

学校現場における教師の児童の捉えは、現状のみを評価することに終始し、かつ教師の理想に近い「よい子」でいることを求めてしまうことが多い。「芽線」の捉え方とは、そういった児童の捉え方とは一線を画し、将来的な社会構成員としての姿までを想定する、本研究独自の児童の捉え方である。

児童の見取りについては、どの教師でも日常的に行っていることであり、特別ここで述

べる必要はないと考える。本研究で用いる「芽線」は、日々の児童の見取りに「その児童の将来の可能性」を描くことを加える。

例えば、学級の中に、みんなを引っ張っていくリーダータイプではないが、困っている人にそっと手を差し伸べてあげられるT児がいたとしよう。教師が日常的に行っている見取りでは、「困っている人にそっと手を差し伸べてあげられる優しい人」として、T児を捉える。しかし、「芽線」による見取りでは、「リーダータイプではない」、「困っている人に手を差し伸べる」、「優しい人」というT児に見られる特性からさらに、介護職や看護職、CA等の現存する職業に就いている姿までを描くのである。

このような捉えは、教師の主観的なものであり、児童の将来無数にある選択肢を限定的な枠にはめ込んでしまっているように見える。さらに、児童にとって必要感のない捉え方であるとも言えよう。しかし、「芽線」の捉えは他者評価の一つであり、児童の自己評価とどのような関連性が見られるか検証することに意義はあると言えよう。

また、このような考えに至る上で、これまでの研究を散見したところ、小学校段階のキャリア教育について、その方法論の曖昧さ⁽¹⁾が見受けられ、実践が確立されていないことが挙げられていることから、「芽線」の捉え方が小学校段階のキャリア教育に適か否かを実証していくことに何ら問題はない。さらに、「芽線」の捉え方は、子供の「職業観・勤労観⁽²⁾」を育成していく上で、児童と教師がつながる⁽³⁾ために必要な方法と成り得ると考える。

そこで本研究では、「芽線」を「今日の前にいる児童の姿（その児童に見られる芽）から将来の姿を描くことで、現在と将来を結ぶ線」と定義する。

⁽¹⁾ 佐藤広志(2013)によると、現行のキャリア教育は、「職業観・就労観の育成や、社会人基礎力などの目標設定はなされていても、それを実際にどうやって、どういう方法で身に付けるかを示していない」、「この点は、まだ十分な検討が尽くされていない実践課題」である、「これから様々な方法論が試みられ、検証されていくことになるだろう」と述べられている。

⁽²⁾ 国立教育政策研究所生徒指導センター(2002)によると、「職業観」とは、「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識」であり、「就労観」とは、「勤労に対する価値的な理解・認識」であり、「職業としての仕事や勤めだけでなく、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割遂行などを含む、働くことそのものに対する個人の見方や考え方、価値観であり、個人が働くこととどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準となるもの」と定義されている。

(<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf> 2019.1.7 取得)

⁽³⁾ 吉武聡一、西山久子(2011)は、小学校におけるキャリア教育では、「つなぐ」をキーワードとして「子ども達と教師の間にしっかりとつながりができ、信頼関係ができて落ち着いた学級になることが、キャリア教育の推進の基盤となる」。その上で、「キャリアカウンセリングを適切に行っていかなければならない」とし、キャリアカウンセリングを「子どものキャリア発達を支援するための個別援助のことであるが小学校段階においては、児童のさまざまな体験活動における思いや気づきを受容的態度と共感的理解を基礎に、『観る・聴く・受け止める』というコミュニケーションを積極的に行っていくための方策である」と述べている。

変化の激しい現代においては、上記で定義する「芽線」によって子供を固定化された職業に結び付けることへの乱暴さも懸念されるかもしれない。しかし本研究においては、「将来の可能性を見据え、可能性を広げるといった意味」であると捉え、固定化した職業へと誘うものではない。このような、「芽線」といった視点を持って、教師が継続的に子供と関わる中で起こる変容について明らかにしていきたい。

また、本研究では、小学校で実施するQ-U調査(河村, 1999)とデータ分析において個人情報扱う予定である。関係者のプライバシー保護や人権の保護に最大級の配慮をする必要がある。この点に関しては、「個人情報の保護に関する法律」等の法令、その他の規則、倫理規定を順守し、最大限の注意を払うものとする。

2. 方法

令和5年度、A県公立小学校4校において、2年生(1名)、4年生(2名)、6年生(1名)の学級担任4名と担当する教室の子供を対象とする。4名の勤務年数は、令和5年4月当初、勤務年数1年1名、勤務年数2年1名、勤務年数5年1名、勤務年数11年1名である。

各学級担任が、令和5年度1学期当初や年度途中に、自己肯定感調査(東京都教育委員会, 1999)やQ-U調査(河村, 1999)を行い、その結果から特に気になる子供を抽出する。

各学級担任は、その子供に対して「芽線」を意識して、継続的に関わっていく。そして、抽出した子供への関わりと反応を、継続的に記録する。5~7月を第一期、9~11月を第二期として、記録をしていく。

この記録から、【研究1】では、「芽線」を意識することによる子供への効果を探っていく。また【研究2】では、教師が「芽線」による関わりを継続することによって、教師自身の子供の見方はどのように変わり子供が変容するかについて、該当教師による省察を基に探っていく。

3. 【研究1】教師が「芽線」を意識することによる子供への効果

(1) 【結果】

ア 第6学年 学級担任X

(ア) 抽出した子供の実態と、教師の芽線

4月20日に実施した「自尊感情測定尺度(東京都版)」アンケートで、A児は項目4「私は自分のことが好きである」を「1 当てはまらない」、項目8「私はほかの人の気持ちになることができる」を「1 当てはまらない」、問16「自分にはよいところがある」を「1 当てはまらない」と回答した。これまでA児は、得意の図画工作科の授業では、友達から認められている面も多いが、他教科や休み時間では認められることが少ない様子であった。休み時間は、友達と一緒に遊ぶ一方で、授業では一人でいることが多く見られた。また、昨年度からの引継ぎ資料では、特定の友達とのトラブルが多いと記載してあった。具体的には、気持ちを言葉で伝えられず手が出てしまうことや、授業中の離席、突発的な発言が多く、周りからはあまりよく思われていないことが多いと書かれていた。

A児を観察していると、清掃の前準備として休んだ友達の机を下げてから休み時間をしていたり、ごみ箱にごみがたまっていると「ごみ袋を持っていくね」と自分ができることを自ら探し、

責任を持って行動したりする様子が見られた。また、A児は絵が得意で、周りの友達からも絵の上手さは周知のことであった。この姿から、「誰かがしなければいけないことを自ら探し出し、自分から進んで行える子供である」と担任は捉えた。

そこで、A児の芽線を「クリーンセンターのバンクシー」と捉えた。また、上記のことは周りの友達からも気付かれておらず、本人も無意識に行っている様子であった。さらに、これらのことをA児に伝えることや、他の子供に伝えることを通して、A児が少しでも自分のことが好きになると共に、周りから必要とされている存在であることに気付くことができるよう支援していくことにした。

(イ) 第一期の子供の変容

上記のように、A児が学校行事で高学年として他学年に親切に接している時や、休みの子の机を下げている時等、「誰かがしなければいけないことを自ら探し出し、自分から進んで行える」姿が見られた時には、その場でA児に伝えた。また、帰りの会の「よいこと見付けタイム」で担任が伝えるなどして、A児のよい行動が周りの子供に伝わるようにした。また、毎日声かけを行った上で、本人のよいところをその場で伝えるようにした。

学級活動では一週間振り返りカードの記入を行った。この活動では、一週間の振り返りと次の一週間の目標を書き、その内容に対して教師がコメントを記入していった。

このような関わりを行ったことで1学期末(7月14日実施)の「自尊感情測定尺度(東京都版)」アンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」を「2 どちらかという当てはまらない」、項目20「私には自分を必要としてくれる人がいる」を「2 どちらかという当てはまらない」と回答した。項目4と項目20の向上した変化については、担任の関わりのみが効果のあったことではないと考えるが、A児の無意識だった特性を本人と周りの子供に伝え、認めたことで、A児は「誰かがしなければいけないことを自ら探し出し、自分から進んで行える自分」を意識できたのではないかと考える。

また、図画工作科の学習で作品を作り終えた後、友達の作品に対して、「俺のよりいいな。」と話す場面があり、自分の作品と友達の作品を比べた上で相手のよさを認めるような発言をしていた。このように、自分のことだけでなく、友達と関わり合いながら価値を認め合うようになった変容が見られ、周りから認められているという安心を得たと考えられる。

しかし、項目16「自分にはよいところがある」を「1 当てはまらない」と回答しており変化が見られなかった。そこで、面談を行い、本人の意識を聞き取るようにした。その結果、A児自身は褒められていることに気付いていないことが分かり、周りから伝えられている自分のよさに気付いていないことが分かった。

(ロ) 第二期の子供の変容

学校でも行事活動が増え、最高学年として行動する場面が多くなった。その中でも、9月に行われた学習発表会では、劇の練習中に褒める、休み時間練習を見守る、グループ練習中はグループ全体のよくなったところを伝えるなど、第一期に見られた課題を受けてA児のよさを担任が認知していると分かるような関わり方に変えるように意識した。そうしてきたところ、グループ内

でも意見を交わしている場面が多く見られるようになり、友達との接し方が少し改善されてきた。学習発表会の振り返りでは、「グループみんなで練習して声をかけ合うことで成功した達成感を感じ、最後までやり切ることや努力を積み重ねていくことでよい結果に近付けると気付いた。」と書かれていた。

しかし、10月に入ると、休み時間に落ち込んでいるA児を心配したクラスの子供が声をかけても無視をすることが度々あった。心配して声をかけた子供にどうして落ち込んでいるのかを聞いたところ、タブレットで自分と好きな人の相性を調べて、あまり相性が良くなかったので休み時間教室の片隅で落ち込んでいるということが分かった。そこで担任は、休み時間にA児に対して「どうしたの」と声をかけたが無言であった。授業後には「先生に話したくない。相談は友達にする。」と書かれた紙を渡してきた。その後も落ち込んでいたことに関する話をA児から話すことはなかった。友達との関わりについては、図工で「わたしの大切な風景」の学習で遠近法について学び、「こんな描き方があるんだ。」と感動していた。遠近法を生かした絵を描き、友達からは「すごい。」と声をかけられたことで微笑む姿が見られた。相談は友達にすると言っていたA児は、友達との関わりについては悪くはなっていなかった。

11月に入り、Q-U調査を行った結果、要支援群にプロットされていた。調査後の面談週間で、最近気になることは何かを聞いたところ、特定の3人から嫌がらせを受けていることが分かった。3人はA児が好きな人とどうなったのかを執拗に聞いてきたので、「好きな人に振られたことを3人に伝えたが、そのことをクラスの他の友達に広めたり、みんなが自分のことを噂したりしているのではないかと感じている。」と教えてくれた。そのことが嫌だったため、教室では控えめに過ごし、時には友達や担任を無視していたことが分かった。A児は、好きな人や他者と関わる係活動をせず一人でいる時間を多く設けることによって、3人からの嫌がらせが少なくなったと話していた。この対話を通してA児は担任に自己開示をして話すようになった。

11月15日の帰りの会前に、友達にふざけ半分で手を出していることがあり、担任が注意すると、黙ったままだった。クラスの中でも、最近ふざけて手を出す子供がいたことから帰りの会で全体に指導した。帰りの会の後、ふざけ合っていた相手の子供に話を聞くと、その子供からふざけ合いが始まったことが分かった。A児を呼び、担任はA児からふざけ合いが始まったという誤解をしていたことを謝罪した。

11月17日、A児が授業間の休み時間に相談に来たので話を聞くと、「この前話していた3人がまた嫌なことをしてくる。」とのことだった。具体的には、じゃんけんをする際にA児が勝つように仕向けていたらしく、A児はそのことがとても嫌だと話していた。その後、3人から話を聞いたところ事実だと確認が取れた。しかし、これまでの経緯を聞くと、自分たちがA児の好きである人と話すだけで殴ってくることや、自分の話だけをずっと近くで話すなどA児に嫌なことをされたので、距離を置きたいがどうしてもよいか分からず嫌がらせをしていたと話した。

さらに、11月16日の下校中には、A児がしつこく話して来るので「先に帰るね。」と言ってからその場を離れた友達に対して、A児は仲間外れにされたと勘違いをし、本でその友達の頭を殴るというトラブルがあったことも分かった。これらのことを担任がA児と話して事実確認をすると、「自分は言葉よりも手が先に出してしまった。話すべきだった。」と自分の行動を振り返り、本で殴った相手に謝罪した。これまでトラブルがあったときは振り返ることや謝罪することをしな

かったA児に変容が見られた出来事だった。今まで担任に「友達から嫌なことをされた。」と言わなかったA児が、困ったことを自分から話すようになった。担任が謝ったことで、A児は誠実な大人に出会えたことや自分を知らうとする存在に出会えて、メタ認知が促されたのではないかと推測する。

イ 第4学年 学級担任Y

(ア) 抽出した子供の実態と教師の芽線

B児は4月当初から、給食当番でない時に準備や片付けを進んで手伝ったり、授業中に積極的に発表したりする姿が多く見られた。係決めでは司会に立候補し、話し合いを進める姿も見られた。一方で、授業中に自分が話したい話題の説明が止まらなくなったり、休み時間には、友達同士で話しているところに割って入って自分の話をしたりする姿が見られた。

4月24日に実施した「自尊感情測定尺度（東京都版）」アンケートで、B児は項目4「私のことが好きである」を「1 あてはまらない」、また項目19「私は誰の役にもたっていないと思う」を「4 あてはまる」と回答した。学級では「心のノート」と題して、毎週末に「一週間がんばったこと」、「一週間の中で困ったこと、もっとこうしたいなと思っていること」をノートに記入する時間を設けた。

4月27日のB児のノートには、「自分はいつもしゃべりすぎてしまうので、あまりしゃべらないようにしたい。」と書かれていた。そこで、5月1日に移動教室の授業の前に時間をとり、心のノートの内容についてB児に聞いた。B児は「自分が言った時ばかりみんなから否定される。自分がしゃべると嫌な顔をされることがあるからしゃべらないようにしたい。」と話した。また、「3年生の2学期から、周りから冷たくされている。」と話した。具体的な場面を聞くと、授業中にB児が説明したことに対して、他の子供が「それって〇〇じゃない？」と聞き返したり、B児とは違う考えを言ったりしたことが、B児は「否定された」と感じていることが分かった。また、友達同士で会話しているときに自分も入って話をしたら嫌な顔をされたと話した。

B児を観察する中で、司会や力仕事を率先して立候補して取り組んだり、大きくよく通る声ではきはきと話したりする姿から、「人前でも臆せず、全力で取り組むことができる子供である」と捉えた。そこで、B児の芽線を「〇〇市祭り保存会（公式チャンネル）会長」とした。また、「B児は友達の些細な言動を否定的に捉えている」、「友達に合わせてコミュニケーションをとることが苦手」、「積極的に取り組む背景には、自分のことを認めてほしいという思いがあるのではないか」と考えた。そこで、B児と友達の関わりを観察し、友達の言動を否定的に受け取ってしまっているときに、友達の思いを担任と一緒に考える場を設けたり、積極的に行動している姿を認めたりすることで、B児が誤解せずに少しでも自分のことが好きになれるように支援することにした。

(イ) 第一期の子供の変容

B児が、友達の言動に対して誤解して否定的に受け取っていると感じた時には、個別に声をかけた。

5月10日の算数の時間、B児の発表に対して、C児が「僕はD児と違う考え方をしました。」

とB児の考えにつなげて発表しようとする、B児は「どうせ、俺の考え方は違うだろ。」と腹を立てていた。算数の授業後、B児とC児を呼び、C児の発言の思いを聞いた。B児のことを否定しているわけではないことがわかると納得し、C児に勘違いしていたことを伝えた。

また、6月14日、6月20日の体育の時間では、マット運動で「壁倒立を成功させたい」という目標を持って何度も技に取り組んだ。その姿を認めながら、教師と一緒に練習に取り組むことで、壁倒立を成功させることができた。「B児が何度も練習して頑張ってきた姿を見ていた。B児が成功できて先生もうれしい。」と伝えた。

このような関わりを行った結果、1学期末(7月20日実施)の「自尊感情測定尺度(東京都版)」アンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」は「2 どちらかというとあてはまらない」、項目19「私は誰の役にもたっていないと思う」を「3 どちらかというとあてはまる」を選んでおり向上していた。友達の言動の気持ちについて考えたり直接友達の気持ちを知る機会を持ったりすることで、誤解したまま否定的に捉えることが減ったからではないかと考える。また、頑張って取り組んだ結果、目標を達成できた経験ができたことで、自分のことを認められるきっかけになったのではないかと考える。

(ウ) 第二期の子供の変容

2学期当初の8月29日に書いた「2学期に向けて」の目標ワークシートでは、「自分のよいところ・とくいなこと」には「大外刈り」、「好きなこと・夢中になっていること」には「柔道」、「将来の夢」には「柔道で全国制覇」と書いた。また、「こんな自分になりたい」には、「勉強は自主学习ノートを制覇(最後まで終わらせる)したい。そのために、毎日必ず1ページ取り組みたい。」、「生活では、元気に過ごしたい。そのために、ご飯をたくさん食べるようにしたい。」と書いていた。そこで、B児には柔道の話を意識的に取り入れながら会話するようにした。「柔道でしているトレーニングの話」や「近々ある柔道の大会」について話した。B児は、「好きなYouTuberがいて、柔道の練習日以外の日もその人の動画を見てトレーニングをしていること」、「全国大会が開かれるのでその大会に出場しようと思っていること」等を教えてくれた。さらに、B児は体全身を使ったスポーツが好きで、特に「サスケ」というテレビ番組が好きだと嬉しそうに話していた。

係活動を決める際に、B児は「好きな筋トレを係活動でやりたい。」と教えてくれた。以前話していたYouTubeの話と関連させて、係活動でもやってみたいと考えたようだった。1学期は「友達と同じ会社なら何でもよい。」といった様子のB児だったので、2学期の係活動では得意なことを生かす場になってほしいと考え、家でやっているトレーニングのことをさらに詳しく聞き、帰りの会でみんなに紹介してやってみるよう勧めた。B児は「筋トレ会社」の社長となり(他2人)、火曜と木曜と金曜日の帰りの会で、みんなが筋トレをする時間を進行するようになった。

9月5日に、学校で行っている「なかよしアンケート」に関する面談を行った。B児は、「困っていること」の欄に、「歌を歌っているときにじろじろ見られる気がする。」、「大きな声でしゃべってもなかなか聞いてくれないことがある。」と書いていた。詳しく聞く中で、「歌詞を間違えた時に見られるので、まずは歌詞をしっかりと覚えたい。」、「相手が話しているときもあったから気

を付けようとは思っている。」と話した。担任はB児が普段から大きな声で歌っていることを認め、その場面での周りにいた人の気持ちを想像して伝えた。その上でB児に対して「周りの人達は嫌がらせてやっているわけではないと思うんだけど？」と伝えたところ、少し安心した表情をして頷いていた。

9月25日の学級活動の時間に、「学級目標にさらに近づくためにクラスでしたいこと」を話し合った。司会をしたい人を聞いたところB児が立候補した。B児は話し合いの中で、「1学期に集会を開いてくれた6年生に2学期は4年生が招待してお楽しみ会をする」という案をみんなに提案した。B児の提案をクラス全員が賛同し、「6年生とのお楽しみ会」を計画することになった。B児は司会として、話し合いを進められたことや自分の考えが採用されたことに喜んでいて、話し合いの後日も、次の話し合いに向けて意欲を見せており、「早く学活の時間をやりたい。」と話していた。その後の学級活動の話し合いでも、B児が司会となり活動内容や役割を話し合った。B児は、ドッジボールの進行役となり、ルール説明やチーム分けの原稿を考えた。お楽しみ会当日、ドッジボールの時間には、練習した原稿通りに活動を進めることができた。お楽しみ会が終わった後には、「めっちゃ楽しかった！やってよかった！」と6年生が楽しんでくれたことを喜んでいて、B児にとって、「自分の話を聞いてもらえた」、「自分の案で誰かを喜ばせることができた」と感じる機会になったのではないかと考える。

10月24日に実施した「自尊感情測定尺度(東京都版)」アンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」を「3 どちらかというとあてはまる」、また項目19「私は誰の役にもたっていないと思う」を「3 どちらかというとあてはまる」と回答しさらに向上していた。そのアンケート結果を基に、面談を行った。1学期よりも項目4の数値がよくなっていることの原因を聞くと、「最近トラブルになることが少なくなった気がする。」、「あまり嫌なことがないから。」と話した。2学期の様子から、トラブルがなかったことの要因として、1学期に比べて周りの友達の言動を気にしすぎる場面が少なくなっているからだと考えられた。そこで、B児に「トラブルが少なくなったと聞いて安心したよ。トラブルになることが減ったのは、B児自身の友達との関わり方が成長したからも関係あると思うよ。」とB児の変容が周りとの人間関係を良くしていることを伝えた。自分が成長したと言われてB児は少し驚いていたが、面談後は嬉しそうにしていた。

学習発表会に向けて、B児は「自分の役割を成功させる」と目当てに書いた。目当てについて個別に聞くと、「演技だけでなく、照明の係や片付けも頑張りたい。」と話した。これまでは、自分の発表だけに集中して全力で取り組むことが多かったB児が、発表以外の場面についても考えていることが分かった。そこで、B児の強みである「体を鍛えている」、「力に自信がある」ところを発揮できる場面があれば、発表以外の場面でもB児がより活躍できるのではないかと考えた。担任は、学習発表会に関する力仕事があった際には、「B児の出番！」として意識的に声かけをした。「B児にしか頼めないほど重いものあるんやけど、B児お願いしていい？」と聞くと、B児はとても生き生きと活動していた。周りの子供はB児のその働きぶりを見て帰りの会の「スマイルタイム」で頑張りを紹介していた。また、学習発表会当日の片付けの際も、目当ての通り、誰よりも積極的に働いていた。その姿を見て、担任だけでなく、周りで見ていた教師が認め、励ましの言葉をかけることで、B児はとても満足そうに学習発表会を終えた。

ウ 第4学年 学級担任Z

(ア) 抽出した子供の実態と教師の芽線

4月21日に実施した「自尊感情測定尺度（東京都版）」アンケートで、E児は項目4「私は自分のことが好きである」を「1 あてはまらない」と回答した。E児は、休み時間や授業中には男女の隔てなく学級の誰とでも会話をしたり、学級代表として学級の一人一人に声をかけたりする姿が見られていたため、担任は初めアンケート結果を誤答だと判断し、同月24日に、E児との面談を行った。すると、E児は、「3年生のときに友達とのトラブルが多く、4年生ではみんなと上手くやっていけるか心配している。」と話した。また、「勉強も分からないところがあり、苦手な教科が多いから、勉強についていけるかも心配だ。」と言った。

E児を観察していると、休み時間に自分の仕事でもないのに黒板を消したり、自分の机だけでなく欠席した子供の机もさげて掃除に行ったりする姿から、「誰かがやらなければならないことを、自分から進んで行える子供である」と担任は捉えた。そこで、E児の芽線を「患者のために、自分で考えて行動できる看護師（または介護士）」とした。また、担任の推測ではあるが、E児は上記のことを無意識で行っている（まだ自分で気付いていない）のではないかと考えた。そこで、このことをE児に伝え、認めることで、E児が少しでも自分のことが好きになると共に、「誰かがやらなければならないことを、自分から進んで行える」という自分の特性に気付くことができるよう支援することにした。

(イ) 第一期の子供の変容

E児が黒板を消しているときや、授業時間が始まったときに学級の友達に声をかけているとき、欠席した子供の配布物を机の中に入れておくとき等、「誰かがやらなければならないことを、自分から進んで行える」姿が見られたときには、機を逃さず即時にE児に伝えた。E児の行動が「学級のためになっている」ことや、「誰かのためになっている」こと、「学級代表としての責任感ある行動である」こと、「4年生になってがんばろうという気持ちが伝わって来る」ことを伝えた。

また、E児は友達との人間関係を心配していることから、休み時間の終わりや、帰りの会の後、個別に声をかけ「友達とのことで悩んでいることはないか」や、「うまくいっていないことはないか」、「心配なことはないか」等を聞いた。5月26日の帰りの会の後に、同月25日の放課後友達とのトラブルがあったことを聞いたので、同月29日の休み時間を使いトラブルがあった子供の話を聞き、その日の内に解決した。

このような関わりを行ったことで、1学期末（7月14日実施）の「自尊感情測定尺度（東京都版）」アンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」が「2どちらかというにあてはまらない」と向上した。もちろん、担任の関わりのみが効果のあったことではないと考えるが、E児の無意識だった特性を伝え、認めたことで、E児は「誰かがやらなければならないことを、自分から進んで行える」自分を意識できたのではないかと考える。また、友達とのトラブルはあったものの、すぐに解決できた経験を通して、トラブルがあってもすぐに解決できる環境にいる自分に多少の安心感をもてたのではないかと考える。アンケート実施後（実施当日）、帰りの会の後に、項目4の選択が1から2に上がった理由をB児に訊くと、「まあまあ、良くなかったかな。」

と答えた。自分のことを4月よりは好きになれたB児の変容が見られた。

(ウ) 第二期の子供の変容

2学期第1週目(8月31日, 9月1日)に, 学級内で面談を行った。学習面に関する不安な点を具体的に聞いたところ, 第3学年までの算数や国語(特に漢字)の既習内容が理解できていないことが不安に繋がっていたことが明らかとなった。この点に関しては, E児も同様に「算数の掛け算とか割り算, 大きい数のところとかが分からない。」「(漢字に関して)今まで習ったのを自学(自主学習ノート)とかでやっているけれど, どれが分からなくて出来ていないのかも分からなくなっている。」と話した。

そこで, 9月4日より「学び直しの漢字プリント」, 「学び直しの算数プリント」と題した1~3学年までの漢字・計算プリント集を希望者に配布し, 自主学習ノートに何度も繰り返し問題に取り組めるようにした。このプリント集をE児はどちらも持っていき, その日からすぐに漢字と計算に取り組んでいた。9月26日には, 自主学習ノートを提出しながら, E児は「漢字はすごく自信がある。分かってきた。」と担任に話していた。既習内容に不安を感じていた学習面に, 少し自信をもててきた様子であった。また, E児は, プリント集を契機に「自分は漢字が得意である」と思うようになり, 10月12日に実施した2学期前半の漢字50問テストでは, 48問正答し96点を取ることができた。しかし, E児は「100(点)じゃなかった。悔しい。」と今までよりも点数が上がった嬉しさよりも, 思った点数ではなかったことへの悔しさを露わにした。これまでの学習に対して自信がなかったE児から, 漢字には自信のあるE児へと変容したことが分かる事例であった。

算数の学習に関しては, E児は「掛け算とか割り算はできるんだけど, 数が大きくなったら(3桁×2桁や, 3桁÷2桁以上の計算)できなくなる」と話し, 個別に見てみると, 途中計算のマス目がずれてしまったり, 繰り上がりや繰り下がりをおぼえてそのまま計算してしまったりして答えが違ってくるというケアレスミスをしていることが傾向として多かった。E児にその傾向を伝えた後, テストや宿題のドリル等で, 見直すようにはしているが, この点に関しては, まだ結果(点数)には結び付いておらず, 「算数は好きじゃない。」というE児の発言に繋がっている。

10月17日より, 総合的な学習の時間で「なりたい自分~過去・現在・未来へ~」という単元を通して, 将来の自分になりたい仕事を探す活動では, E児は看護師について調べていた。また, E児は母親と看護師の仕事について家庭でも何度か話をしたようで, 「看護師になるには, 算数とか理科もできていなきゃダメやってママが言っていた。」「だから, 算数は嫌いだけど, できるようにしないと。」と担任に話した。学習面への不安が強いままであった場合, 恐らくE児は看護師について調べ, 母親と話をした時点で, 看護師になることを諦めていたように思う。しかし, 漢字・計算の復習プリントを通して, 自信を付けている途中であるE児にとって, 看護師は「自分にも手が届きそうな職業」として捉えることができたと考える。算数は苦手な, 好きじゃない教科ではあるものの, 看護師の道に進むためには, 自分に求められる要件(乗り越えなければならぬ壁)であることを受け止め, 前に進もうとしているE児である。E児は, 10月19日実施のアンケートでは, 項目4「私は自分のことが好きである」は「2 どちらかというとはまらない」, 項目16「自分にはよいところがある」も「2 どちらかというとはまらない」を選択してい

た。

エ 第2学年 学級担任W

(ア) 抽出した子供の実態と教師の芽線

4月19日に実施した「自尊感情測定尺度（東京都版）」アンケートで、F児は項目4「私は自分のことが好きである」を「1 当てはまらない」、項目7「あなたは自分がダメな人間だと思いませんか」を「1 よくある」、項目10「あなたは自分を大切に思えますか」を「4 まったくおもえない」と回答した。これまでF児は、自分が困っていることや、したいことを自分の言葉で友達や教師に表現することが少なく、仕草や表情で表そうとすることがあった。自分から友達へ関わろうとせず、休み時間に一人で読書をしていることも多かった。そこで、F児の悩みや思いを聞き出すために面談をした。F児は、「困っていることはない。」と言い、本当の思いは口にしなかった。

F児を観察していると、ペア活動や班活動では黙って一人であることが多かった。教師の声掛けに対しても自分から友達に関わろうとする様子が見られず、机の上で関係のないことをしていたり、手が止まって動かなかったりした。休み時間には、集団で遊ぶドッジボールやサッカーをせず、誘われても入ったりすることなく、一人で読書をしたり2～3人でボール遊びをしていることが多かった。そこで担任は、F児の姿と、アンケート結果を踏まえて「自分のことを分かってもらえる友達が増える」ようにF児と友達を繋げることができるよう支援をすることにした。また、F児の一人で素早く係の仕事を行うよさを褒め、価値づけることを心掛けるようにした。

F児との関わりを振り返ると、漢字が得意という特性が見て取れた。そこで担任が、連絡帳に「この漢字は何と読むでしょう？」と書いたところ、F児は答えを書いて、逆に「この漢字は何と読むでしょう？」と漢字クイズを連絡帳に書いてきた。このように、漢字に興味があり、他の人とつながるきっかけとなり得ると考えた。これらのことから、芽線として「漢字×読書×教える・伝える・紹介する＝司書、学芸員」を導き出した。さらに、おそらくF児は、これから総合的な学習の時間の「地域」単元で、校区にある寺や神社を周り、そこに書いてある難しい漢字を目にする度に「何て読むんだらう？」と気になり、その難しい漢字を読むことで、神社や寺がどうしてそこに建てられたのかが分かり、歴史にも興味を持っていくのではないかと、さらにそのことを誰かに紹介したくなるのではないかと見立てた。よってF児についての最終的な芽線は、「国宝勝興寺の学芸員」とすることとした。

(イ) 第一期の子供の変容

授業中や休み時間では、F児の様子に大きな変化は見られなかった。係の仕事については、担任の「F児のがんばりが先生やみんなの役に立っている」という価値づけや、周りの友達からの「早い」、「ありがとう」、「助かる」等の称賛により、F児は隙間時間を見つけて更に働くように変化した。この変化があったが、1学期末（7月19日実施）の「自尊感情測定尺度（東京都版）」アンケートでは、項目に変化が見られなかった。そこで、再度面談をした。「どうして自分のことが好きではないのか。」尋ねると、「お母さんに怒られるから。」と自分の言葉で思いを表現した。面談を重ねるうちに「友達はたくさんいて、仲良く遊んでいる。」、「みんなの役に立った時に褒め

られたい。」「問題が早く解けた時に褒められたい。」とF児の思いの一部が見えてきた。1学期後半から始めた連絡帳を介しての一言日記では、「A児とゲームをした。」「算数のプリントを頑張った。」など自己開示を続けるようになってきた。また、一学期末にしたお楽しみ会では、担任に任された「終わりの言葉」を、自分から友達を誘って二人で挑戦した。また、言葉の内容もF児自身で考え、堂々と言った。

(ウ) 第二期の子供の変容

2学期第4週(9月22日)の算数の授業で、F児のノート指導を行った。F児は、マス目の使い方も曖昧で自分の考えも書くことが出来ておらず、手遊びをしていた。どのように書けばよいか分からず手が止まっていたため、改めて字を書き始める場所やどんなことを言葉で書けばよいのかを具体的に声掛けした。この声掛けに対して、「うまくできない」と、自分の思うように書くことができない悔しさから最初は泣いて手が止まっていた。しかし、友達から「手伝おうか」と言われても「いい、できる。」と、休み時間にかかるまで一人で時間をかけて書き直し、教師に自分から見せてきた。「時間をかけて一生懸命頑張ったね。ノートの書き方が分かったから、これから自信を持って授業を受けられるね。」とF児の頑張りを認め、今後への励ましをした。F児はその後、一斉指導だけでは一人で学習を進められずに手が止まることがあった。教師はその都度何を書こうとしているのかや、今何を書く時間なのかを一緒に確認した。F児は教師の具体的な声掛けによって1学期に比べてスムーズに学習を進めることができるようになっていった。2学期9週に入った頃には、自分一人でノートに言葉や図を使って考えを説明できるようになった。教師はそれを赤書きで「よく考えたね」や「頑張ったね」、「Gさんと似ている考えだね」とコメントを続けた。F児は、ペア活動で友達に自分の考えを話したり、自分から手を挙げて発表したりするようになっていった。しかし、2学期10週(10月31日)の国語の授業で、間違っただけを発表した時に自分を責めて泣く姿があった。9学期9週(10月25日)実施のアンケート項目4「あなたは自分のことが好きですか」に対して「4 まったくあてはまらない」の理由に、「発表で間違っただけを言ったときに自分のことが嫌になる」と答えていたため、今回の涙も自尊心が傷ついたことが要因だと考えた。教師は学級に「間違っただけについてどう思う?」と投げかけた。子供たちは「恥ずかしいけど、いいこと。」「誰だって間違えると思う。」「いいんだよ、間違えても。」「大丈夫だよ。」と、F児を励ましながらいかに助け合って学習を進めたいという思いを共有した。

F児は漢字に大変興味があった。教師はF児の興味を生かして自己開示できるよう連絡帳に難しい読み方の漢字クイズを出した。するとF児はそれに答えるだけでなく画数の多い漢字の読み方のクイズを教師に出してきた。教師は近くにいた子供たちと「F児は漢字が得意だね。」とF児を称賛し、F児を漢字リーダーに任命した。F児は今では学級を盛り上げようと帰りの会に堂々と漢字クイズを出してみんなを楽しませている。さらに、教師はF児の強みを伸ばそうと漢字検定を受けることを勧めた。F児は学級にいる漢字検定を受けているH児から話を聞いたり6年生になった自分が漢字検定に合格して表彰されている姿を想像したりして、受ける気持ちに心が傾いた。そして、F児の保護者も、漢字検定のことに関心を持つようになってきた。この漢字への興味が、友達関係への変化ももたらした。F児は、国語のペア活動では漢字検定を受けているH

児の元へ自分から行って意見を交換するようになったり、休み時間にはH児と一緒にサッカーをする回数が増えていったりした。また、H児に関わらず学習で困っている友達がいた時にはそつと教える姿が多く見られるようになった。

2学期に入ってからF児を含むイベント係が計画していたハロウィンパーティの話合いでは、学級を楽しませようと鬼ごっこやかくれんぼ等のルールを工夫していた。教師の「話し合っただけ面白いイベントになりそうだね。体育係とも相談してみたら考えが広がるかもね。」という声掛けに対してF児は体育係を話し合いの輪に入れてゲームのルールの確認や工夫を始めた。ハロウィンパーティ本番では、顔を上げて堂々と話をし、友達からのゲームの質問にもよく考えて答えた。終わった後どう思ったか聞くと、「楽しかった。みんなも楽しんでくれたと思った。次は、違うイベントも試してみたいですか。」と言った。教師は「みんなを楽しませようとたくさん準備したね。緊張したけど協力して最後まで頑張ったね。」と、自分の努力が人を幸せにすることを価値づけた。

F児は、12月のクリスマスパーティの話合いを始めており、「ゲームの内容も学級の皆に聞きながら決めたい。」とより広い繋がりを自然と求めるようになった。2学期第9週(10月25日)実施のアンケートでは、項目1「あなたは今の自分でよいと思いますか」に「1 とてもそう思う」、項目5「あなたはみんなの役に立ちたいと思いますか」に「1 とてもそう思う」と答えた。

(2) [考察]

研究1では、「教師が『芽線』を意識することによる子供への効果」について、子供のアンケート結果と、教師が取った手立てと子供の変容についての担任の記述をもとに明らかにしてきた。各担任が抽出した「気になる子供」の共通点としては以下の内容が見られた。

- ① 自分のよさや特性に気付いていない。または、よさや特性を肯定的に捉えておらず、当然のことと認識している。
- ② 自分のことを他人がどう見ているのかを過剰に気にする。または、悪いように言っているように思い込む。
- ③ 何らかの形で不安を抱え、それを自力解決しようとしたり、うまく紛らわせたりすることができない。

このような子供たちに対して、各担任が「芽線」の視点から子供のよさや特性を伝える等の手立てを行った。各担任が行った手立ての共通点としては以下の内容が見られた。

- ① 子供をよく観察する、話を聞く、活躍の場を設ける
- ② よさや特性を「個性」として伝える
- ③ 周りの子供たちや大人にも関わりをもたせる

4月当初と第二期の終わりとを比較すると、子供へのアンケート結果については、肯定的に変化したものが多くあった。また、アンケートの数値としては明確に表れていなくても、各担任の見取りによると自分自身や仲間を肯定的に捉えるように変化した事例も多くあった。

このように、教師が「芽線」を意識することで、子供たちの自己肯定感が少しずつ上がったことが見えてきた。抽出した子供たちは、友達との関わりが苦手な傾向にあったが、教師が「芽線」を意識したことで友達との関わりの一助を担う意識が生まれ、該当する子供は教師や友達に対して自己開示をするようになったことが伺えた。さらに、教師が、子供の好きなことや興味のある

ことを知ろうとし、それを学校の教育活動と結び付けたことで、子供が前向きに活動に取り組み、自信を付けていくことにつながったと考えられる。学校教育において、教師が子供の特性を見取り、それを活かそうと考える視点が重要であることは明白である。教師が「芽線」を定めることで、前述の視点を強く意識するきっかけとなったことが推察される。

4. 【研究2】教師が「芽線」を意識することについての教師自身による省察

第一期の後と第二期の後に、「芽線」を意識して教育活動を行ったところ自分自身の意識にどのような変化があったかについて、自身が省察した記述をもとに分析を行う。

(1) 【結果】

ア 第6学年 学級担任X

(ア) 第一期の教師の省察

1学期間、A児と関わったりA児とほかの子供の関わりを観察したりすることを通して、友達との遊びの中で、相手のことを考えて行動している場面が多いと分かった。しかし、教室に入ると、これまでの行動からなのか何かレッテルが貼られているようには感じた。また、A児が書き残してきた一週間振り返りカードの記入内容を通して、週ごとに明確な目標を持って達成するために活動していることが分かった。

1学期間は、担任がA児に毎日声かけを行い、本人のよいところをその場で伝えられるようすることで、認められていることを感じられる場を増やした。また、周りの友達にもA児の行ったよい行動が認知されるように帰りの会のよいこと見付けの時間に担任が発表することで、周りの児童のA児への偏見も少し緩和することができた。しかし、本人と個別面談をした際に褒められていることに気付いていないことが分かったため、今後、気付ける手立てを考えていきたい。

2学期以降も、A児のよいところを認めることと、A児と周りの友達との関わり方を観察することを継続的に行っていく。また、A児自身が認められていることを認知できるように働きかけていきたい。

(イ) 第二期の教師の省察

A児との関わりを通して、友達との関わり方が分からない子へは、他者からどう見られているかや、どう関わっていけばよいかを伝えられるように教師はどのような手立てや接し方をすべきかを考える必要があることを学んだ。例えば、教師からの声が届いていない、友達からの注意も肯定的に捉えられない子供に、日々の取組の中でよかったところを全体に広めることや、その場ですぐ褒める、教師側の非は認め子供に寄り添う等、常に見守っていることや理解しようとする行動が必要となる。もちろん発達段階として見たり、子供の実態を踏まえたりしたときに、適切な声かけであるかを吟味する必要がある。しかしA児（9月29日実施のアンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」を「2 どちらかという当てはまらない」、項目8「私は他の人の気持ちになることができる」を「2 どちらかという当てはまらない」、問16「自分にはよいところがある」を「2 どちらかという当てはまらない」、を選択している）のように自己肯定感が低く、他者との関わりが得意ではないと感じている子供にとっても、少しずつ自己

開示し、関わっている相手との壁を崩していく中で、自分に対して声をかける教師に対しても、話を聞き、自分のことを多面的に分析する姿に変容することも明らかとなった。また、子供によっては、うまく SOS を伝えられない子供もいることや SOS の出し方が場合によっては加害者になっていることもあると気づき、今後は、見たことだけで判断せずに、よく状況を聞いてから判断しなければならないと教師自身も意識が変容した。

第一期と同様に、A児が不安に思っていた友達との関わりを「一週間振り返りカード」や「適切な声かけ」で補ったことで、友達関係や教師との関係を少しずつ深められた子供は少なくなかった。一人の子供との関わりを通して見えてきた課題が、学級の課題として浮かび上がってくることもあることも明らかとなった。

イ 第4学年 学級担任Y

(ア) 第一期の教師の省察

B児と関わったり他の児童との関わりを観察したりすることを通して、B児は何事にも積極的に取り組む一方で、認められていないと感じ、友達に否定されていると感じることが多いことが分かった。特に、友達との関わり方については、友達の言動から気持ちを読み取ること、友達に合わせてコミュニケーションすることが苦手だということが分かった。

前期は、B児が他の子供と関わっている場面を観察し、個別に話す時間を設けることで、B児が誤解したままの状態になることを減らすことができた。また、B児が友達の気持ちを知ること、「自分を否定しようとしているわけではない」ことが分かり、友達に対して少し安心感を持って関われるようになってきた。

課題としては、担任が「こうなってほしい」という強い思いを持ってB児に関わったことで、逆にネガティブな面に目を向けたりトラブル対策ばかりになったりしたことが挙げられる。そのため、B児の「得意なこと・強み」に目を向けたり、B児が「こうになりたい」と思うことに焦点を当てたりした関わりを意識していきたい。

(イ) 第二期の教師の省察

1学期の課題として挙げた「担任が『こうなってほしい』という強い思いで関わったことで、逆にネガティブな面に目を向けたりトラブル対策ばかりになったりした」ことから、2学期はB児が「どうになりたいか」を担任と共有することが重要だと捉えた。そこで、B児の学期始めや行事の目当て、心のノート等にかかれた内容を基にB児と関わることで、B児の「こうになりたい」という思いを共有した。さらに、詳しく聞き取る中で、今取り組んでいることを認めたり励ましたりする声かけを意識的に行った。これまでは、目当て等を書いたワークシートにコメントを書き、子供に返すだけになってしまいうことが多かった。しかし、書かれている内容を話のきっかけとして、休み時間等の話題に取り上げ、より深く知ることで、B児の芽線で捉える手がかりになったと考える。またその結果、担任自身の見取りだけで声かけを行うより、B児が「頑張りたいこと」や「興味があること」に焦点を当てた声かけが増えてきたと考える。B児の行動を観察する際に、B児の目当てや感想を想起しながら関わるようになった。B児自身も「柔道や体を使った運動」が得意なこととして再認識して、それをクラスでも生かしてみたいという姿に変容した

と考える。

他の児童についても、同様のことが言える。ワークシート等で書いた目当てや将来の夢について、教師の朱書きで返すだけで、実際に話題として出すことをこれまであまりしてこなかった。B児との関わりを通して、他の児童にも目当てや夢として書いている内容を実際に話題として触れ、深く知る機会を作りたいと思った。学級の児童が個々に力を発揮できる場として、学級活動の時間が活用しやすいと感じた。係活動や学級会を通して、「自分の得意なこと」に取り組み、その力を生かして活躍できる場を意図的に仕組んでいくことの大切さを再認識した。そのためには、児童の「強み」や「得意」を把握して、機会を逃さず伝えていく必要があると思う。

ウ 第4学年 学級担任Z

(ア) 第一期の教師の省察

1学期間、E児との関わりを通して、一見誰とでも仲良くしているように見えていたE児が、実は人間関係にとっても心配していることや、真面目に授業を受けている一面がありつつも学習面での心配があることが分かった。人間関係については、E児を通して、誰と誰の仲がよいのかや、E児のように過去のトラブルを気にして人間関係を心配している子供がいること、そして、その子供たちにもE児と同様にトラブルを早期に解決していくことが重要であることが見えてきた。また、E児が真面目に授業を受けている様子（行動）から、どうして授業を真面目に受けているのかを考え、その心の内に不安があることも見えてきた。そして、学級内にはE児のように、真面目に授業を受けているが、心の内には不安がある子供がいることも、1学期末の面談から見えてきた。

2学期以降は、E児にその特性を伝え、認めることと、人間関係についてこまめに訊くことを継続していく。そして、1学期にはあまり触れなかった、学習面の心についてE児との対話を図っていききたい。

(イ) 第二期の教師の省察

E児との関わりを通して、自信がない子へは、不安を少しでも軽減し自信に変えられるようにするために、教師はどのような手立てを取ることができるのかを考える必要があることを学んだ。例えば、自分に自信が少ない子供に「なりたい自分」と称して職業調べをさせると、「先生、俺、何すればいいん？」と聞かれることになるだろう。自信がないために、何になりたいのか、何になれそうなのかも分からない子供にとって、「なりたい自分」、「(努力すれば)なれそうな自分」を思い描くことは無理なのであろう。もちろん、発達段階として見たり、子供の実態を踏まえたりしたときに、適切な学習内容であるかを吟味する必要がある。しかし、E児（10月19日実施のアンケートでは、項目4「私は自分のことが好きである」は、「2 どちらかというとはまらない」、項目16「自分にはよいところがある」も、「2 どちらかというとはまらない」を選択している）のように、自分に対してあまり肯定的ではない子供にとっても、少しずつ不安がなくなっていくことで、「なれそうな自分」は思い描けることが明らかとなった。また、自分が苦手としていることに対して、なりたい自分に近づくためには、「できるようにしないと」と諦めず努力していこうという姿に変容することも明らかとなった。

第一期と同様に、E児が不安に思っていた学習面を「学び直しプリント」で補ったことで、1～3学年の学習内容に少しずつ自信を持たせた子供は少なくなかった。1人の子供との関わりを通して見えてきた課題が、学級の課題として浮かび上がってくることがあることも明らかとなった。

芽線によるE児との関わりを通して見えてきた課題としては、担任とE児との関わりだけではなく、学校全体、保護者や地域をも巻き込んだ関わりをしていくことが必要となってくることが挙げられる。前述のE児の発言「看護師になるには、算数とか理科もできないとダメだってママが言っていた。」「だから、算数は嫌いだけど、できるようにしないと。」から考えられるように、E児が看護師を目指していることや、その中でも算数が苦手だけど、自分の今後の課題として捉え努力していることは、E児や担任、母親だけが分かっていることではなく、学級や学校全体、地域や家庭でも共有し、励ましの声をかけるようにしていくことが、今後のE児を支えていくことに繋がる。もちろん、E児のように自分に自信がなかなかもてない児童だけでなく、他の児童にとっても、多くの目でその子に見られた芽を将来との線で結んでいくことは、児童の今後の成長過程にプラスになると考えられる。

エ 第2学年 学級担任W

(ア) 第一期の教師の省察

1学期間、F児との関わりを通して、初めは友達との関わりが薄そうに見えていた。しかし、F児が実は人間関係には心配していないことや、文字を介しては自己表現ができること、学級の役に立ちたいと思っていることが分かった。人間関係については、友達が好きであることと、学級の役に立ちたいと思っていることを活かして今後、係でのイベントの企画、友達との準備で、活躍できる場をつくっていくことが支援として見えてきた。学習面については、自分の考えを文字や図を使って書かせたり、F児の言いたいことを他の児童に代弁させたりするという支援が見えてきた。

2学期以降は、F児との個別の面談や、連絡帳でのやり取りを続けながら、認めることを常に念頭に置き、上述した支援をしていきたい。

(イ) 第二期の教師の省察

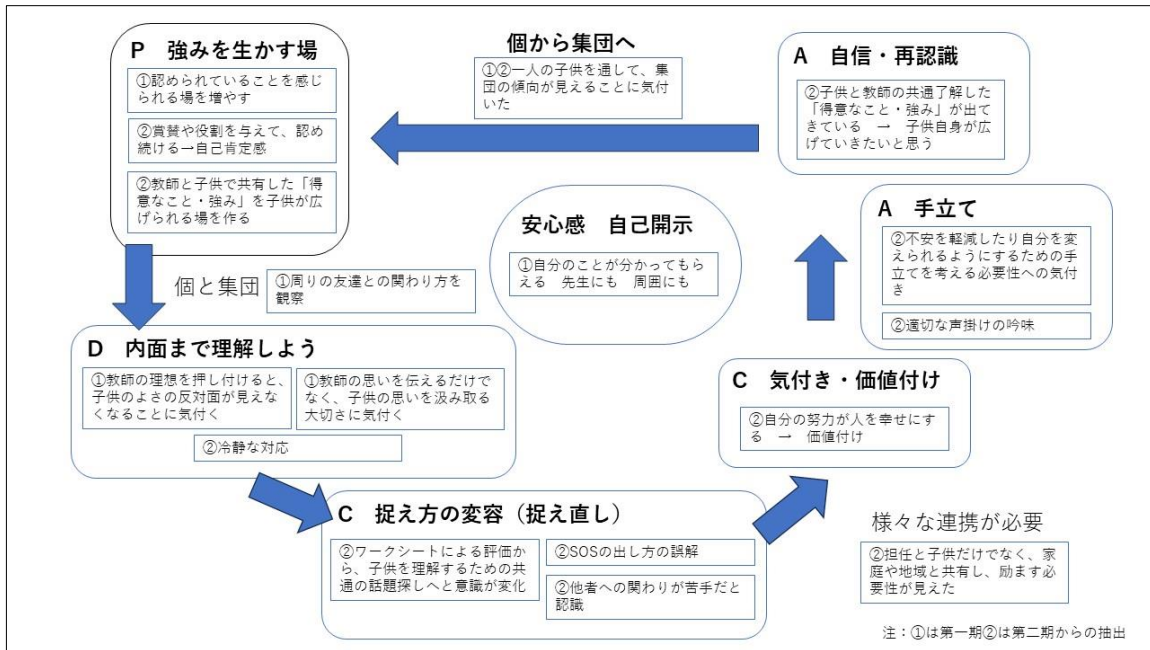
F児との関わりを通して、本人の興味や課題に向き合った上で将来の方向付けをすることが大切だと学んだ。授業中、手が止まっている姿には様々な背景がある。教師はそれを決めつけず寄り添った言葉かけや支援を様々に試す必要がある。また、表面上の友達の繋がりをつくるのではなくF児の興味や頑張りから輪を広げていく必要がある。これらの時に称賛や、役割を与えて認めることを続けていくことでF児の自己肯定感が上がる一助になる。

また、自己肯定感が低かったF児に望ましい変容が見られたのは、教師のF児のみに対する関わりだけでなく、その周りにいた子供たちへの声かけや働きがあったからこそだと考える。周りにいる子どもも一人一人違う。どの子供に働きかけるかによってF児の反応は違ったであろう。今回のF児への働きかけをきっかけに見えてきた、周りいる子供への繋げ方を模索することを今後の課題としたい。

(2) [考察]

各担任の記述からは、第一期よりも第二期の記述内容が増え、子供の理解が促されたことが分かる。また、子供の捉えについての記述内容も深くなっていることが見て取れる。

これらの記述から、教師が「芽線」を意識することで、教師の意識や子供への関わりがどのように変わり、子供の捉えへとつながったのかを推察するために、研究者一同で記述内容についてKJ法によって分類・整理した。なお客観性を確保するため、各文章から意味を抽出する際には、各学級担任の記述に携わった研究者とは異なる者が担うようにした。



【 図1 KJ法による分類・整理 】

このようにして、第一期と第二期で合計17の意味が抽出できた。これらを整理したところ、担任と子供の間で以下の相互作用が生じる可能性が示唆された。

教師が該当する子供に対して「芽線」を意識することで、子供が「認められていることを感じられる場」を増やしたり、教師が積極的に「称賛や役割を与えて認め続ける」といった、「強みを生かす場」を作ろうとしたりする。

その過程において教師が一方向的に強みを生かす場を作るだけでは子供が捉え直さないことに気づき、「子供の内面まで理解しよう」という意識が働く。

このようにする中で、子供は「自分のことを分かってもらえる」といった「安心感」を感じるようになる。

教師は、その「子供の捉え方を変える(捉え直し)」が起きたことで、新たな子供の側面に「気づき」、その側面を「価値付け」たり、子供の内面に即した「適切な声掛け」を行ったり、さらにその子供の「強みを生かす場」を設定したりしようとする。

このように子供に関わる中で、子供は「自信を付け」たり、自分のよさについて「再認識」したりする。このような過程を、螺旋的に繰り返す中で、教師の子供の見方が深まると同時に、新たな関わり方法や手立てが明らかとなり、子供への関わり方が変わっていく。

また、教師は、抽出した特定の子供にこのように意識を向ける中で、その子供を通して周りの子供や集団の傾向が見えてくることに気付く。

前述の相互作用は一つの仮説に過ぎないのだが、教師が「芽線」を意識することで、教師自身の子供の捉え方に変化をもたらしたことや、その変化によって子供に対する手立てや関わりも、より子供のよさや内面を捉えたものへと変化した可能性が見て取れる。

5. 結論

本研究は、「教師の『芽線』による子供の捉えと変容の可能性」について調べてきた。その結果、教師が「芽線」を意識することで、教師自身の子供の捉え方に変化をもたらし、子供に対する手立てや関わりが変わり、その結果、子供の肯定的な自己理解を促したり、他者とのプラスの関わりを育むことにつながったりして、自己肯定感が高まるという可能性が示唆された。

また今回の4名の実践から見えてくる共通点として、繰り返しPDCAサイクルが行われたことが挙げられる。「芽線」という計画(Plan)を立て、実際に手立てをしてみる(Do)。しかし、「芽線」から「こうすべき」という理想を子供に押し付けてしまったり、子供の思うような反応が得られなかったりすると、周囲の子供たちに事実を確認したり、教師が素直に謝ったりするなどの修正(Check)が行われ、その積み重ねとして、子供たちの自己肯定感が少しずつ上がってくることにつながる(Action)。このようなPDCAサイクルが繰り返されたことで、教師の見取りの精度が上がり、手立てが磨かれてきたことが見えてきた。

教師の子供への声かけや手立てには、確固たる正解は無い。その時の子供の状態や発達段階等を考慮しながら最善の方法を模索し、施したり修正したりすることを繰り返していく。このことを積み重ねる中で、子供たちが少しずつ成長していく。

日本の教師は、子供に対して、学習指導と同時に全人的な教育を行っており、一人の人間として自立していく力を育むことを目指している。「芽線」は、学習指導にとどまらず、子供を全人的に見て、他者とのつながりの中で居場所や活躍できる場所を見出そうという営みにつながる視点である。教師は、該当する子供のために手立てを取ろうと考え、その子供の周囲の子供たちや大人にも声かけをしたり、関わらせたりしていく必要性に気付いていく。

このように、教師が「芽線」という視点を持つことで、一人の子供を起点として学級全体や保護者の関わりが活発となり、学級全体を高めていく学級経営の一助となることが見えてきた。

本研究の課題としては、以下の2点が挙げられる。

1点目は、「芽線」の概念そのものの理解の難しさである。「芽線」は、日々の子供の見取りに「その子供の将来の可能性」を描くものである。しかし、本研究では、Q-U調査や自己肯定感尺度による調査を通して気になる子供を抽出児として挙げたことで、どうしてもそれらの値が低い子供に注目することとなり、特に第一期では低い自己肯定感を上げるための手立てへと意識が向きがちであった。未来志向で子供の将来を思い描き、個性や能力を発掘していくといった「芽線」の捉えそのものについて確実に理解した上で研究を重ね、妥当性についてさらに検討する必要がある。また、今回の調査数は2学年、4学年、6学年の4事例のみである。さらに調査数を増やして研究を重ねる必要がある。

2点目は、「不安を抱えること」や「失敗をすること」は、悪ではないという視点の重要性である。転ばぬ先の杖のように、教師は子供たちに不安や不快な思いをもたせたくないという気持ち

が働き、先回りをして障害となるものを取り除くことがある。とりわけ「芽線」を思い描いた場合、そのような意識が教師に働くことが多数見受けられた。一方で、「不安」や「失敗」を事前に取り除くと、自力解決できない人間として育つ危険性があることも考えられる。「不安」や「失敗」と適切に向き合い、それを解決するために自分で悩み考える、乗り越えるといったレジリエンスを身に付けることも、成長する過程においては必要である。

「芽線」は、ある一定の職業へと誘うものではなく、あくまでも子供の将来の芽となるものへ可能性を広げるものである。子供の可能性を見据えた上で、あくまでも自己決定を子供に委ね、励ます、応援するという意識を持てるようにすることが重要である。このように、「芽線」による捉えと手立てが、どのようにレジリエンスに影響を及ぼすのかについては明らかにしていく必要がある。

上記の2点を踏まえて、「芽線」による教師の捉えがどのように子供に影響を及ぼすのかということについて、さらに研究を進める必要がある。

参考文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（2021）
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）総則」（2017）
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」（2017）
- 4) 文部科学省『キャリア・パスポート』例示資料」（2019）
- 5) 文部科学省「小学校キャリア教育の手引き」（2022）
- 6) 辻井満雄他「小学校教育におけるキャリア教育の展開～自己分析と他者評価の関連性について～」富山国際大学子ども育成学部紀要 第10巻 第2号(2019)
- 7) 佐藤広志「キャリア教育のヒドゥン・カリキュラム」、『教育総合研修叢書6号』pp.. 71-85(2013)
- 8) 国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」(2002)
- 9) 吉武聡一・西山久子「小学校におけるキャリア教育の推進に関する動向と実践上の課題」、『福岡教育大学紀要 第60号』pp.. 191-202 (2011)
- 10) 河村茂雄「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」図書文化 (1999)
- 11) 東京都教職員研修センター「自尊感情や自己肯定感に関する研究（第4年次）」(2012)